

選評

選評

町田 康

ナガノ・イズミ氏の「世界のすべての座礁」は、知と理に偏って、理窟で割り切れない感情が渦巻く現実に対応できないサクラコが、幼き頃に出会った、同じ苦しみⅡ言葉に囚われた者に再会することにより、座礁とは怯えて動かないことではなく、行動の末にする座礁、それを畏れず行動して座礁することこそが生、ということを知るに至る成長小説である。

言葉と世界、知識と現実、の境界で動けなくなるということ、海と陸、座礁して腐敗する鯨になぞらえ、また、サクラコが現実に向き合う対応できない様子も友人との会話や行動を描いて表現している。書体が変わる青年の手紙の部分は説明的だが、最後の一枚を意図的に「座礁」させるという仕掛けにより、読者を飽きさせない工夫がなされている。

その一方で、青年の存在や亡父の記憶などが過度に劇的で、作り物めいた印象があるのが残念だった。友人たちも、「導く人」として役割的で、生きた人間のように感じられなかったのも残念な点だった。

三好純太氏の「さくら絵画教室」は読んでいて気持ちの良い作品だった。小説は人と場所と時間が掛け合わさって成るが、それぞれの時間を背負う人、と、絵画教室という場所、を丁寧に描いて、これほどの作になった。人と人が干渉し合えば劇的だが、そうなりそうでないのかかえってこの作品を成功に導いた。

月野灯氏の「風見線が廃線になります」は帰郷小説で、「おひとり様」の麻子とその生の根源を確認する過程が描かれる。人の心のざわめきが景色に滲み出て説得力があった。

言葉は毎日ちがって見える

堀江敏幸

ナガノ・イズミさんの「世界のすべての座礁」は、複数の言葉の位相をならべ、機智と抒情とがうまく溶け合う寸前で、わずかに破綻していくところに魅力があります。主人公のサクラコを中心とした立場の異なる女性たちのやわらかさ、海で溺死した父の遠い声と謎めいた手紙の送り主の言葉の硬さ、それらを見わたす語り手の視線。その全体が渾然とした印象として残るのは、海がサクラコから逃れていくからではなく、彼女がずっと海のなかにいて、ゆれる自分を意識し、「行為の果てに座礁する勇氣」を見定めようとしていたからでしょう。

三好純太さんの「さくら絵画教室」が描くのは、そこに集うさまざまな生徒たちの群像ですが、この空間は主宰者である夕貴自身の、詳しくは書かれていない閉じられた部分を解放していくための装置です。浩介という自閉症の青年とのやりとりを通じて、彼女は「繰り返しを凡庸と捉えてはいけないのかもしれない」と気づきます。同じ絵の具の色でも、「昨日と今日でまったく同一とはいえない」。昨日の言葉が今日はちがって見えることを教えてくれる、文章教室でもあります。

月野灯さんの「風見線が廃線になります」は、過去への遡行と自己の再発見といった整理を拒む一篇です。両親の離婚、郷里の小学校の同級生や商店街の人たちとの記憶のずれに、喜びや安堵よりも大きな不安がすべりこみます。鉄道路線や街なかの、淡々とした描写がそのずれの効果を高めています。収束地点のべつの可能性として、この不安をカレールのなかに溶け込ませるのではない締めくくり方を想像してみるといいかもしれません。

手が込んでいる

青山七恵

「世界のすべての座礁」は、過去と現在を語る三人称の地の文、ゴシック体の二人称の語りかけ、青年からの手紙という異なる次元の文章が立ち並び、噛みあっているようどこか不安定なその感じが、不思議な魅力を放っていた。手紙の文面がいかにも作りもの的な気がするもの、読み進めていくうちに、生きていく、そして生き続けようとする人間の、泥臭いものがきようなものが透けてくる。手の込んだ端正な小説ながら、読後にはほんのりと熱いものが残った。車種名の羅列、鯨の生物学的知識、パエリアの調理法など、細部がみっちり詰まっているのもよかった。

「さくら絵画教室」の語りは地に足がついた安定感があり、読んでいて心地良い。自閉スペクトラム症の青年を中心に、主人公が開いた絵画教室に集まるさまざまな事情と個性を持った生徒たちとの交流、地域のゆるい連帯が力みのある筆で素描されている。各々の想いを抱えて絵と向きあうひとびとにたいして、声高に何か主張することもなく、謙虚な距離感を保った作者の眼差しが好ましく映った。

「風見線が廃線になります」は、謎めいたメーブルが届く冒頭から、ミステリーかホラーめいた雰囲気漂う。過去の探索によって現在の主人公の輪郭が徐々に緩んでいくような、常に不穏な気配があつて、最後まで惹きつけられて読んだ。再会した旧友の温かさよりも、個人の記憶の不均衡から生まれる風景のよじれのようなものが印象深かった。